

昭和二十四年七月十五日 第三種郵便物認可
(毎月一回・十五日発行)

(通第二一六号)

慈光

第十九卷

第五号

次

善もほしからず、悪もおそれなし

(附・自督余録)

近角常観……………(1)

愛

書と求道……………

近角先生著「信仰の余瀝」

福島政雄……………(8)

菅瀬芳英師法話抄……………

聚墨生……………(12)

目

他力念仏と現世利益……………

三瓶徳英……………(18)

科学者の目に映る歎異鈔の驚異……………

花田正夫……………(21)

善もほしからず、悪もおそれなし

近 角 常 観

『それがしはまたく善もほしからず、また悪もおそれなし』これ実に他力信仰の極地である、『善のほしからざるゆえは弥陀の本願を信受するにまされる善なきがゆえに、悪のおそれなきというは弥陀の本願をさまたぐる悪なきがゆえに』

そもそも世上の善と称するものは皆相對の善である。その相對の善をもって少善根少功德と貶する所以のものは、他に絶對の大善根大功德があるからである、即ち弥陀大悲の本願これである。この弥陀の本願の大慈大悲の日輪の前には、他の諸善万行はあたかも天上無數の星辰の如くである。日一度出でて無數の星辰忽ちその光を失うものであるこの仏日の照耀を蒙りてみれば星の光は既にほしくないのである、

我等、善のほしきは未だ善に飽足せぬからである。我等如来大悲の御恵みに飽足してみれば、何ぞ自力の難修難善を好むべき、否、今まで自力の定散二善、三福九品の差別

善を好み励みつつありしは、此の如き無限大悲の御恵みを知らなんだからである。今はじめてこの大慈大悲の本願に遇いたてまつりてみれば、今まで相對差別善をたのみにして居りたることの恥しやと更に善がほしくなくなつたのである。これすなわち『もろもろの難行難修自力のこころをふりすて』と仰せられた点である。選択集に捨開擲と仰せられたのがこれである。夜が明けてから行灯は不要である。行灯のすてられぬのは無明の暗夜を照らしたまう法身の光輪、尽十方無碍光の仏日を仰がぬからである。

『悪のおそれなきというは弥陀の本願をさまたぐる悪なきがゆえに』暗が恐ろしくないとはいふは、如何なる暗でも妨ぐることの出来ない日輪が出て下さるからである。この大慈悲は如何なる無明闇黒をも照破したまう光明である。『弥陀の本願には老少善惡のひとをえらばれず、ただ信心を要とすとしるべし、そのゆえは、罪惡深重、煩惱熾盛の

衆生をたすけんがための願にてまします』闇黒強ければ強き程なおいやまさる大悲の光明である。『しかれば本願を信ぜんには他の善も要にあらず、念仏にまざるべき善なきゆえに、悪をもおそるべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきがゆえに』難化の三機、難治の三病も、とてもとても本願醍醐の妙薬には敵することが出来ぬのである『阿弥陀如来の仰せられけるようは、末代の凡夫罪業のわれらたらんもの、つみはいかほどふかくとも、われを一心にたのまん衆生をばかならずすくうべしと仰せられたり』この仰せを聞く帰命の一念は、

『われらが今度の一大事の後生御たすけ候えとたのみ申し候』と、お慈悲の仏日を拜まずには居られぬ。そのおがんだ一念がすなわち『たのむ一念のとき往生は一定御たすけは治定』と、日出でて夜が明けるのである。夜が明けた以上は雲霧烟霞が如何にあらんとお恐るべからず、何物も日光を障碍するものなきがごとく、悪のおそれなきというは弥陀の本願を妨ぐる悪なきゆえである。実にこれ煩惱惡業が氣にかからぬ様になつた有様である。

悪が氣にかかる間は善がほしいのである。善のほしいのは大善大功德に腹ふくれぬからである。大善大功德に腹ふくれば見れば、いかな罪惡深重、煩惱熾盛のものも、その

大慈悲に融るかされて悪が氣にかからぬようになったのである。これ実に弘願一乘海の不可思議である。その弘願というは、大經に説くが如し、一切善惡の凡夫みな生ずることを得るもの皆阿弥陀仏の大願業力に乗じて増上縁とせざるはなし、である。行巻にこの一乘海を釈して曰く『海というは久遠よりこのかた凡聖修する所の難修難善の川水を転じ逆誘闡提恒沙無明の海水を転じて、本願大悲智慧真実恒沙万徳の大宝海水となす。これを海の如しと喩うるなり。まことに知んぬ、經に説きて煩惱の氷解けて功德の水となるが如し』

とあるが、実にこれが至心信樂、南無阿弥陀仏の外に善もほしからず、悪もおそれなし、の味わいである。

南無阿弥陀仏の天目の前には難修難善の星辰も何等の光もなく逆誘闡提、恒沙無明の黒暗霧も何の障りもなさぬのである。觀經の願説にあらわれたる定散二善、三福九品の如きは、如来の本意ではない、かえって隱影の実義は本願成就の尽十方無碍光如来の大慈大悲を説くためである。化巻に曰く、

『彰というは如来の弘願を彰し、利他通入の一心を演暢し達多・闍世の惡逆に縁つて、釈迦微笑の素懷を彰し、韋提別選の正意によって弥陀大悲の本願を開闡す。これすなわちこの經の隱影の義なり』

と、これ実に人生問題において、阿闍世同様の我等が、本願醍醐の妙薬によりて救われる事実である。すでにこの醍醐の妙薬ある以上は他の薬もほしからず、如何なる難病も恐れなしである。

又、阿弥陀經の願説に現れたる念仏は、たとい諸善万行の少善根福德に對して多善根多福德と言えども、なお自力奮勵の相對善にして未だ絶対不可思議の大慈悲を認めぬのである。然るに隱彰の実義にいたりては、五濁惡時惡世界、濁惡邪見の我等にむかつて名号不思議の信心を勧めたもうのである。化卷に曰く、

『彰というは眞實難信の法を彰す。これ乃ち不可思議の願海を光闡して無碍の大信心海に帰せしめんと欲してなり』

と。これ実に他力の眞味である。薬の成分を取調べていまだ薬の不可思議力を信ぜざるものは、即ちこれを処方調劑したる医者、薬劑師の不可思議を信ぜぬのである。名号不思議を信ぜざるものは誓願不思議を信ぜぬのである。これ実に極難信と名づけらるる所以である。『念仏はまことに淨土にうまるるたねにてやはんべるらん、また地獄におつる業にてやはんべるらん、総じてても存知せざるなり、たとい法然上人にすかされまいらせて念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからず候』これ実に薬の力を信じたのである、医者^の力を信じたのである。即ち名号不思議

『それおもんみれば、信樂を獲得することは、如来選択の願心より發起し、真心を開闡することは大聖矜哀の善巧より顯彰せり』

と仰せられたが、即ち本願の妙薬を大聖医王の善巧によりて与えらるる信樂開發の一念である。我等幸にこの善巧方便の時いたりてここに眞の善知識に遇いたてまつりて、横超の本弘誓を光闡し、不可思議の願を演暢したまえるを一念無疑に至心信樂したてまつるの外なきなり。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。

明治四十三年五月十五日發行。求道誌所載。

自 督 余 録

母の病氣を見舞いたるを御縁として、我門徒をはじめ近隣の人々にお慈悲を話して、みなみなひとときわ気のついた人が多かった。そこで此度は帰京の道すがら、病氣の人々を尋ねて共に御慈悲を喜ばしていただくことと決心した。

○ 先ず我が中学時代よりの親友梶井研丸君をたずねた。同君は二十七八年間かわらざる断金の友である。今春以来心臟病にかかりて静養せられつつあるをききて、尾張なる君が寺を訪うた。同君をはじめ一家の方々天に踊り、地におどらんばかりの喜びをもって迎えられ、何と応えてよきや

議、誓願不思議を信じたのである。医者^の力を信じたものは必ずその薬を飲む如く、我等誓願不思議にたすけらるるを信ずるや否や、必ず念仏申さんと思いたつ心おこり来るのである。信は願より生ずれば念仏成仏自然なりである。

此の如く医者^の力を信ずる所以のものは医者其人に信すべき価値があるからである。名医は患者自ら容体を述べざるに、一診、すでにすでにその病根を認識して薬を与えるのである。善知識は善く病を知り薬を識る。如来は大医王である、仏かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫と仰せられてある。極惡最下の衆生のために極善最上の法を説く、即ち我等が根機を洞察して、選択本願を建立したもうたのである。

『親鸞におきてはただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとの仰せをこうむりて信ずるほかに別の子細なきなり』

念仏は薬である、如来は医王である。善知識は薬劑師である。我等患者は信ずるほかに別の子細なきなり、である。何となれば、諸善万行のいずれの薬もおよび難きことを洞察して超世無上に撰取し、選択五劫思惟して、光明寿命の誓願を大悲のもととして成就したまいし南無阿弥陀仏である故に、信卷別序に、

ら分からねぬ、相顧みて唯感謝の念仏あるばかりである。

○ 同君の寺を訪うことこれで前後五度である。而してその二度目は懺悔録にかきておきた我煩悶中に尋ねた友人は実に君である。考えて見れば今より十五年前、中夏炎天の空に夏草の生い茂りたる堤を内外身心の熱のために苦しめられつつ、全身に汗して累々として君を尋ねた昔が想い出される。その時の蘇鉄もある、道路も昔のままである。山も山、路も昔にかわらねど、かわりはてたる我心かな。

○ 友人は胸を打明けて話さるるには、いよいよ心臟病と分かったとき万一のことがあったならば君によりしく言うてくれ、御蔭で大にお慈悲を喜ばして貰うて御恩の程がありがたいとは申しおきながら、なんとやらん君に尋ねたいとおもうて居たに、わざわざ来てくれたのは嬉しいとて、さて申さるるには、歎異鈔の九章はかねて承知して居るものの、実は病氣にでもなったら其時こそは何事もさしおきてお念仏も出来るであらう、喜ばれるであらうと思つていたが、事實は正反對である。また自分の信友の村長が村政のために力を尽し椅子によりながら心臟が破裂してその職に斃れた。又清沢満之師が病軀をひっさげて粉骨碎身されたことを考えると、自分の如きは医者から読経も説教も禁止

されたからとて、おめおめ身を携こまきして日暮しをして居るはなんとなく気がすまぬ心持であるが、如何であるかとのたすねである。

○
そこで尋ねられた私が却って友人によりて大なる教を得た。如何にもそうである。病でないときは病氣にでもなつたら喜ばれるであろう。病氣になると、病氣がなかったならば喜ばれるであろう。つまり何時も喜ばれぬのであるよるこぶべき心をおさえて喜ばせざるは煩惱なり、死なんずるやらんと心細くおぼゆることも煩惱の所為なり、よくよく煩惱の強盛に候にこそ、とはこのことじゃ。御同様に病氣になったら念仏三昧になれるであろうなどと思うのが自分の買いかぶりして居るのじゃ。しかるに仏かねてしろしめして煩惱具足の凡夫と仰せられたがここじゃ。喜ほうとか、職に弊ねばならぬとか、いらぬ心配するよりも、よく見抜いて下された御心に遠慮なく安心させて頂くのじや。

○
かく頂かして貰うた一念が娑婆のおわり、臨終じゃ。君生きていると思えばこそ、いらぬ娑婆氣が離れぬのじや。散る時が浮かぶ時なる運はきかな、君、信の一念にすでに一たび死んだのじや。いらぬきみを出すじやない。残余のこ

○
所感を話をした。ところが母御の申さるるは、私も全く同様じゃ、喜ばれぬ、何故このように邪見になったであろうとの歎きであつた。そこで前念命終、後念即生をお話して平生業成のありがたきことを話した。平生業成というは、平生御慈悲をいただきおけば病中にも勇ましく喜べて行けるということではない、たとい病苦のために喜べずとも平生にいたしておけば、往生一定じやということじゃ、そこで歎異鈔をとり出して拝読した。

○
曰く。弥陀の光明にてらされまいらするゆえに、一念発起するとき金剛の信心をたまわりぬれば、すでに定聚じやうしゆのくりにさだめしめたまいて命終すれば、もろもろの煩惱悪障を転じて無生忍をさとしめたまうなり、乃至、ただし業報かぎりあることなれば、いかなる不思議のことにあひ、また病惱苦痛せめて正念に住せずしておわらんに、念仏申すことかたし、そのあいだのつみはいかがして滅すべきや。つみきえざれば往生はかなうべからざるか、撰取不捨の願をたのみたてまつらばいかなる罪業をおかし、念仏申さずしておわるともすみやかに往生をとぐべし。

○
この御文を読みつつはじめて気がついたのが、命終すればの一句である。今までは下につけて、命終すればもろも

の身体は仏様より預けられたのじや。大切に養生するのが病人のつとめじや、と申したら、門徒の人が傍より申さるるには、如何にも左様であります、たとい平臥にても息さえ通うて下されば何よりありがたい。ただかくして御病中に御慈悲を喜んで下さるのが何よりの御教導じや。

○
友人にも善知識の御教化を繰返して共に喜んで貰うた。而して「散る時が浮かぶ時なる運はきかな」の御句は今まで臨終の事とのみ思ひ居つたが、この時はじめて前念命終、後念即生の思召しであることを悟つた。実に悟りがおそかつた。この度は徹頭徹尾善知識の御教化に一人氣づかせていただきて実にありがたき極みである。親の病氣や、友人の病氣が私へ対しての御知らせと唯々仰ぐばかりである。

○
この次は美濃の土岐津なる丸茂夫人実母の病氣を見舞うた。平素より聞法篤信の人であつた。しかるにこのたびはにわかに病氣で本復が六ヶ敷きゆえ、夫人が何よりの親への妙薬をと私に來て呉れとの希望であつた。又母御も病苦の中から私が來たら來たらと待受けて下さつた。

○
到着するや否や、何はさておき、病床に臨みて善知識の御教化を取次ぎて御話をした。そして尾張の友人の病中の

○
ろの煩惱悪障を転じて無生忍をさとしめたまうなり、と読んでいたが、これは誤りであつた。すでに定聚のくりにおさめしめたまいて命終すれば、であつた。平生一念発起するときは、はや命終じや。平生の時、善知識の言の下に帰命の一念を発得せば、その時をもって娑婆のおわり臨終とおもうべしと、病床に臨みて讀まして貰うて自分がはじめて気がついた。

○
病人は随分病惱苦痛が多いらしい。念仏の申しにくいも無理はない。源信僧都の横川法語に、信心浅けれども本願深きがゆえにたのめばかならず往生す、念仏ものうけれども称うれば必ず來迎にあずかる、功德莫大なるがゆえに、このゆえに本願にあらうことをよろこぶべし、と仰せられたはここじや。

○
しかるに不思議なるかな、仏前に声をあげて勤行する間は病悩中にもやすやすと眠られる、休まれる。到着の晩はきこえる様に勧めたがリンのきこえる間はまた休まれたとのこと。アアこれ見てもわかる、煩惱にまなこさえられて撰取の光明みざれども、大悲ものうきことなくて、つねにわが身をてらすなり。大悲の願船に乗じて光明の広海に浮かびぬれば、至徳の風静に、衆禍の波転ず。

○

大悲は船じゃ、光明は海じゃ。この病室が願船じゃ、前
栽は光明の海じゃ。船に乗りた以上は気兼ねするのはいら
ぬことじゃ、船に乗りた以上は時節さえくれば彼岸に到着
するのじゃ、大悲の願船には清浄の信心を順風とするのじ
や。至徳の風静かに、衆禍の波転ず。心配せずとも、ちゃ
んとよくして下さるのじゃ、もろもろの煩惱悪障を転じて
無生忍をさとしめたまうなり。南無阿弥陀仏々々々

○

老母はいつの間にか苦もなく安心された。蓋のとれたよ
うなものじゃ最早ただたうなずかるばかりであった弘
誓の船に乗りぬれば、大悲の風にまかせたり、まるで親に
抱かれた赤子の如くなられた。

この御縁ではじめて歎異抄の命終すればの御文まで気づ
かせて貰うた。また観経の廓然大悟、得無生忍は韋提希夫
人の現在身の上じゃ。喜悟信の三忍の味はこじや。

一週間の後病あらたまわりて安らかに往生を遂げられた
与韋提等獲三忍、即証法性之常樂、南無阿弥陀仏。

「求道」七卷四号より。

宿業

仏教の問題はそこにある。
業海に居て業を感知するという問題は人生における微妙
の問題である。業だ、業だとよく云うけれど、自分で人生
苦を諦めようとしてその言葉を借りて来て云っているにす
ぎない。祖聖がこの業を感知せられたものに「遇斯光のゆ
えなれば一切の業繫ものぞこりぬ」とある。遇斯光と云う
言葉の左仮名に「アミダ仏ニモウアイヌルユエニ」と仰せ
られてある。また「モウアウトイウハ本願力ヲ信ズルナ
リ」と仰せられてある。宿業とは本願海中の衆生の宿業
が、仏の本願を聞く人々の上に自然に感知せられるように
なっているとの意であらう。

愛書と求道

近角常観著「信仰の余瀝」

福島政雄

近角常観師は私に信心の眼を開いて下された最初の善知
識であった。それは親鸞聖人の信仰の世界であった。二十
歳前後の頃私は日蓮上人への感激を持ち、その御遺文など
も熱心に読んだけれども、法華経への信仰の道は開かれな
かった。そして二十五、六歳の頃青年期末期の傲慢な贅沢
な煩悶に陥っていた時に、親しい友の勧めによって、近角
師の熱烈な信仰上の法話を聴聞するようになり、二十六歳
の夏七月を境目に、親鸞聖人の信仰の第一歩に入るようにな
った。その因縁はまことに不可思議と言わねばならぬ。
心機一転の後『信仰の余瀝』は最初に読んで色々の感銘
を受けた書物であった。

抑々宗教なるものは、吾々如き不完全極る人間が完全
無欠の仏陀に融かされるのである。吾々如き残酷極まる
動物が、慈愛の魂たる仏陀の懐の中に入るのである。然
るに吾々は不完全でありながら完全と思ひ、残酷であり

業の感知 足利浄円

人間が寄合うて業を論しても人間の知識で割切れるよう
な存在ではない。業は仏語である、仏のみしるしめす生死
海の動乱源をなすものであらう。

業には生根がある。業の根は無明惑から生じたもので、
また業は何時でも四苦八苦をはらんでおり、惑業苦が一体
となって火線輪の如き動乱体である、と仏はのたまう。こ
うした仏のみそなわす業繫を人間はどうして感知するか、
仏教の問題はそこにある。

ながら得意がって居るゆえ、恰も臭きに居て臭きを知ら
ず、暗に居て暗を覚らぬ人の如く、仏陀の光明を仰ぎ見
る心が起らぬのである、若し吾々が自己の不完全なるこ
とを悟らば、忽ちすがるべき所を求めねばならぬこと、
恰も足に傷つけば杖を求めねばならぬと同様である。即
ち人間は如何ほど浅はかなものかを知れば、仏の如何ほ
ど崇高きものなるかは、自然とわかるのである。結局一
時間にも真実自己の罪惡を、懺悔すれば、一足だけ仏
陀摂取の光明に近づくのである。故に懺悔は確かに信仰
に達するの道行に違いない。否真実懺悔の極点に達した
るときは、即ち信仰の猛火が熾んに燃え上りたる時で
ある

心機一転前の私は理想主義の青年であって、自分はよほ
ど立派なものと思ひあがっていた。そして他人に対しては
傲慢な批判を下していた。然るにその私が、自分こそ駄目
なものであると気がつくようになったのは、師から人間の

五分五分根性ということ聴かされ、自分こそ冷たい人間であることを知らされたからである。同僚の教師が冷たいとか、自分の教育熱に対して生徒の方からは何の反応もないとか、他人を問題として、自分のすがたに対しては何の反省もなかった私が、自分の姿に対して目がさめるようになったのはひとえに師のお陰である。

涅槃經に出てゐる阿闍世王の入信物語は、師からはじめて聴いた信仰物語であつた。惡逆の阿闍世の問題はよそ事でないと感じるようになった。そして「悲しい哉、愚禿親鸞」と御自身を悲しまれる親鸞聖人のお言葉が、しみじみと身にしみるようになった。歎異抄が少しもわからなかった私が、その要点を探るようになったのは全く師のお陰である。

併し二十六歳の夏を法悦状態で過ごした私は、まだ本當に自分の姿に目がさめたものではなかつた。その秋急性盲腸炎の手術を受け、友人その他の親切に感じながらも親に対して自分の心がまだすなおになつたのではなかつた。二十七歳の新年は心が落着いたようで、しかも何か親に対して融けやらぬものが残っていたようであつた。次のような近角師の言葉は、その時の私の心の有様を述べられているように感ずる。

が、兎に角我執の角がくだけ始めたことは事実であつた。近角師は懺悔について次のように述べられている。

懺悔は最も弊害に陥りやすきものである。忽ち形式ばかりに流れがちになる。即ち慚愧の心、胸に満ち、張り裂けんばかりの思が發して懺悔の言葉となるべき筈なるに、さはなくて口先きばかり立派にきまり文句をならべたつるようになる。かくなれば猿の人真似をなす如く少しも力がない。かような懺悔なれば死んでいる。而してまたまた力ありげに見ゆるものありても、真実その心は無くして、表面ばかり殊勝らしく空涙をこぼすものがある。此の如きは懺悔にあらず偽善である。かく偽善的懺悔をなすよりも、むしろ不信心の有様を淡白に限なく打明けた方が却つて眞實活ける懺悔に近くある。

三十台の私自身をふりかへて見れば、正しい懺悔というよりも、自分をさらけ出して得意になり、近角師の口真似をしていたように思う。一かど信仰を得たように得意になつて、自分の煩惱をさらけ出して語り、また信仰の論理とでもいうようなものを頭で作り出して、それで相手をとつちめて喜んでいたようである。生活状態は随分乱れていた。それは母を始めとして大切な友人や伯父や父などを私

詩的信仰の地に陥りたる人は、ややもすれば古来の信条に対して疑をはさまぬ程まで、自ら眞実の觀念に住せりと考へながら、その実は眞実の觀念が伴いて居らぬ。即ち無意識に眞実の考へを拒んでいる。自己の未熟を自覺して居らぬ。自覺して居らぬ故に頗る得意である。握つたつもりで握つて居らぬのである。これは世のいわゆる未信者というよりも、むしろ、信者をもって自ら許して居るものに多い。

二十七歳の新年を迎えた時の私の心境は、ここに言われている詩的信仰に近いものではなかつたかと思う。心は落着いているようで、何か解決されていないものがあつたようである。その三月始めに母が熊本から東京まで来てくれたのに、私はその母に対して結婚問題について心を打開くことが出来なかつた。その三月十一日の夜、仏前に灯をあげて眞宗聖典の下の大無量壽經の五惡段の第五の惡というところを不図開いて讀んだ時、そこに述べられている親不孝者のことが自分のことであると気がつき、次第に讀んで行くうちにたまらぬようになり、仏前に伏して泣いた。その時から私には自分の姿が見えて来て、母に対してでも融け、詩的信仰を脱する第一歩に入つたかと思う。それが懺悔ということまで深くなつていたか、それは問題である

の三十台に続けさまに亡くしたので、それから起つた生活意識の乱れともいふべきものであつたが、母を亡くしたのは最も痛切な痛手であつて、非常に心が淋しくなり、母に代る者を相對の女性に求めようとして心が迷ひ乱れたのであつた。まことに言語道斷の有様であつた。

近角師は次のように述べていられる。これは如何にも當時の私の状態を指して言われているように感ずる。

信仰は活物なれば、時々刻々進歩すべきものでありながら、兎角沈滞に陥り易き弊がある。全体信仰と言へば内心の中にたしかにつかんだ心持がなければならぬ。ところでそのつかんだ心持がすると、忽ちこれで十分であると腰を据えるのである。それ故直ぐに沈滞に陥り易いつかんだような心持がしたのは、漸く信仰の闕をまたぎて門内の微光を認めたばかりで、それから大に信念の修養を勉むべきである。私の経験によると、一つ不審な点ありて疑團氷解せざるとき、時機来りて煥然として明らかになることがある。すると直ちに我は眞髓を得た、極致に達したと心得る。これがそもそも懈怠のもとである。これは信念の修養に最も戒むべき点である。全体信仰は恰も池を堀る如く、幾重とも知れぬ底がある。一つ底に達したからとてそれで十分と思つてはならぬ。その底を

破りて行くときは又大に進むべき余地がある。暫くすると又第二の底がある。すると再び又十分であると考へて歩を止める。又歩を止めるも無理はない。底に達する毎に信心に水が出てくるのである。いわゆる徹底した心持がするのである。

このように述べて、併し信仰は無限に進むものであると言われる。或る程度の徹底感で満足しては駄目であると言われるのである。

私はこれが正に当時の私の心境を戒められてある言葉と感ずる。三十台の終り方に西洋に行つた私は、西洋二十年の生活の間にいつしか西洋の煩悩肯定の思想や生活にかぶれたようである。西洋から歸つた私は近角師に対して、煩悩というものも大切なものではありませんかと申して、大目玉をいただいたことがある。師は西洋に行つたものは、兎角そのような心持ちになると言われて、厳しく私を叱られた。やはり私は、詩的信仰を脱していいないで、自分の煩悩を美化して考へていたのではないかと思われる。

師は西洋をまわられた終り方に、御両親のことを考へてたまらぬようになつて急に帰國のことを決せられたということである。私は三十二歳で母を亡くし、三十七歳で父に死なれ、父の死後直に西洋へ向つたのであつた。心は荒ん

菅瀬芳英師法話抄

迷と悟、照らされて知る

迷の世界にいる者は「我は迷いである」と、どうして知ることが出来るか、いわんや自分の住んでゐる境界を、迷いであると名けることが出来るか。

迷いの名は先覚者から「お前は實際に迷界にあるぞ、誠にあふないことである」と、教へていた。後、始めて「我は迷いの衆生である」と了解出来るのである。井戸の蛙は、自分が今どこにいるのか、井戸と天地とはどちらが広いのか知らない。「お前は狭い所、窮屈なところにいるのだ」と知らしていただくのは先覚者のたまものである。

小石に躓く

人は大きい石につまずくものはないが、小石には時々つまずくものである。我等は日常「不急の事」にはいろいろ痛切に考へるけれども、往生の一大事には心をかけず、地獄に近づくことは何とも思われない。あさましいことである

畢竟依を帰命せよ

吾等は二つの矛盾の境界を歩いている。即ち頭に理想を

でいた。印度洋航路の船の旅で、幾度も父の臨終の夢を見て悲しんだが、それはずさんで淋しい心から見た夢であつて、親の慈悲を感じてたまらぬようになる心とは遠く離れていたと思う。私が親の生命に久遠の慈悲を感じるようになったのは四十歳を超えてからである。母を亡くして十余年、父を亡くして五、六年のころからである。それ以前は信仰だといくら言つていても、それは空虚な心であつたと思うのである。

(昭和四十年十一月七日稿了)

種々の菩薩

お経に並べられてある菩薩方というものは實在の人間ではない。仏の慈悲や智慧が種々のひらめきとなつて私共に届いて下さる。智慧と慈悲と云へばたつた二つのようであるが、それが私共のいのちにひらめいてくると、その時は実に種々無量の道と姿をもつて私共に通つて下さるのである。この仏のお心が私共に響いてくる筋道となるところの種々無量の姿をあらわされたものが種々の菩薩方である。

△臼杵老師述・福島先生記△

聚墨生

描き、足は理想と反した現実を踏んでいる。それ故に一方では友人を羨み、一方では矢張り友人を頼りだと感じている。又人間は満足の感と不満足の感とが必ず相交錯している。

この二つは常に矛盾しているが、然しここに共通した一つの確固たる統一がある。それは、満足不満足は別はあつても、畢竟する所、南無阿弥陀仏に信順する外にないということである。

聖人は「清浄光明ならびなし、遇斯光のゆえなれば、一切の業繫ものぞこりぬ、畢竟依を帰命せよ」とお喜びになつた。つまり理想とか現実とか、満足とか不満足とかの感はただこれ生死の業繫である。それゆゑに詮ずる所は弥陀に帰するより外に道がないというのである。「一切の業繫ものぞこりぬ、畢竟依を帰命せよ」と畢竟とはトドのつまりトドのつまりは南無阿弥陀仏である。

仰げばいよいよたかし

故 桂公島は親鸞聖人の六百五十回忌に参詣せられて、
数万の信者を見て

「親鸞聖人は何という英傑であろう。釈尊はまた何という大偉人であろう。開山聖人と同時代の源頼朝の如きは当時は偉かったが、その死後は実に淋しいもので、彼の墳墓がどこにあるのか所在さえ知れぬ。まして誰が廻向の水を捧げるものがある。頼朝は今では忘れられんとしているが、聖人の徳は実に驚異にあたいます」と絶讃されたという。まことに當を得た觀察である。

最も古くして常に新しいもの

ある人が僧侶に尋ねていうには
「あなたの御宗旨はどうも旧式である。私の宗旨は段々改革を加え新しく進化して神に対する解釈も従前と変わって向上した。実にわが宗教は時代相応だが、あなたの宗旨は何だか古い。チト新しく改造してはどうですか」と云うた。その時にその僧は

「そうですか。あなたの宗旨は要するに未だ不完全だから自然の勢で改良せねばならなかったが、私の宗旨は二千五百年以来完全なので、新しく作り変える必要がなく、従前のままで新しいのである」

と答えた、これを聞いてその人は深く感心したという。すべて不完全なればこそ改造が叫ばれるが、真宗の教は

夫とは、事実を事実と知らぬものことであるといえよう
無常の世界を常住であると錯覚しているのである。

つまり仏と凡夫との区別は、事実の通り見るか、事実をそむいて見るかの差に帰するといふてよい。

撰取不捨の真言を事実であると思わぬから、出離の縁がない。如来の仰せを事実とし、事実のままに聞いたのが間違で、この聞のままが信である。

不断煩惱得涅槃

『正信仰』に「煩惱を断ぜずして涅槃を得る」と仰せられている。『教行信証』に所謂「穢悪汚染にして清浄の心なく虚仮諂偽にして真実の心なし」というのが煩惱の側で「ここを以て如来一切苦悩の衆生界を悲憫して、不可思議兆載永劫において菩薩の行を修したまいし時、三業の所修一念一刹那も清浄ならざることなく、真実ならざることあることなし」というのが菩提の側で、この二つの側の離れぬところが当流の煩惱即菩提である。

それ故に何時臨終となつても大丈夫である。たとえば邪魔をせぬままが工事の進捗する所以で、煩惱を断ぜぬままで成仏して貰うのである。然るに煩惱を断滅するというならば、これ仏の工事を邪魔するのである。

百尺竿頭一步を進む

おごる平家は久しからず、ということとは、百尺竿頭の格

始めから完成されたのであるから、改良せずともそのままに新しいのである。

親鸞聖人は「一念とは信樂開發の時尅の極促なり」と仰せられたが、この御言葉の意義はこうである。信心いたせば、去年の歡喜よりも今年のは新しく、昨日の歡喜よりも今日のが新しい。それで念仏を唱えて喜ぶのは、今朝よりも正午の只今が有難味が増長するのである。今日よりも明日が更に新しくなるべきである。

かく念仏は新を追うて止まない。この故に私共の信仰も漸次に新しくなり、古いものはだんだん無くなるのである。現在という時間は、これから始めて現在となるのであるが同時に現在がこれが終りであるとも見られる。現在が始めと思えば新しくなるし、現在を終りと思えば、その時が、即得往生である。

事実を事実と知る

『論註』に「如来とは法相の如く知るが故に」とある。

この意味は、如来とは如実に世間を識知したまえる方に名づける、というのである。如来は実に境の事相をありのままに体得せられた方で、事実を事実と知りたまつた方である。たとえば現実の世界は無常である、それが事実であるこの無常である事実のままを悟られた方を如来と名づけるのである。さて凡夫とは何をいうのであるかといへば、凡

言によつて説くことが出来る。ここに百尺の竿がある、地上からこの竿を登る人が、遂に百尺の竿頭に達した時、この人は、この上もう一步を進むことが出来ようか。

これは出来ぬから、信仰によつて、百尺の梯子から下つて始めて出来るのである。然し、もし信仰によらないならば、百尺竿頭一步を進めば、その人は墜落せねばならぬ。それ故百尺竿頭一步を進めるといふことは普通のことでは出来ない。

どうすれば、一步を移すことが出来るかというに、一步を退く、ということにある。平家は身は微賤より起つて、遂に大政大臣の極位にのぼつた。すでに百尺の竿頭に届いたのである。然るに平家はその上に一步を進まんとした。嗚乎これが危いのである。蓮如上人は「人はあがりあがりて落ち場を知らぬ」といわれた。平家はここに滅亡した。

それで人間が最も謹むべき所は、百尺の竿頭がその分界線である、それ故百尺竿頭一步を進むということは、言いかえれば一步を退くことであらねばならぬ。自分の利害得失だけを計らず、百尺の竿頭を一步退いて、他人の損益も考えねばならぬ。

この道理は他の側より考えると、行つたものは帰らねばならぬ。浄土教の教養は往還二廻向を説いてあるが、ここが長所である。自利のみの信仰を目的としないで、利他を

も味わねばならぬ。往くものは還らねばならぬ、ここに始めて自利と利他が得られる。そうでなければ大乘教とはいわれぬ。

それ故、百尺竿頭一步を進むということは、つまり一つには退かねば危いということと、二つには二利の満足ということを想像せしめる。真宗の信仰は不思議にもこの格言に一致しているのである。

三宝を敬え

聖徳太子の十七憲法の第二条に「篤く三宝を敬え」と仰せられてある。三宝とは、詳しくいえば二つの解釈があるが、仏・法・僧の三宝を宗旨と対照して見るとありがたい意味がある。

僧宝を本義とする宗旨は、仏宝に重きをおかず、人師を重んずるから、所謂「釈迦何人ぞ、我何人ぞ」という見解となつて、仏陀をも崇むべき方としない。それ故この見方は仏に頼らない自力の修業者である、これは禪宗の行き方である。

次に法宝本位の宗旨は、一から十まで法をたより、これによって修行して仏果に到るので、これは理性主義で進むのである。これを解信解行の宗旨という。勿論学解のない者は力が及ばない。この解行を宗とする教義は華嚴、天台の二宗の如きである。この宗旨はたとえば電話をかけるの

に、電話機の構造や、電気の原理を理解してからでなければ電話はかけられぬとするのである。

次に仏宝を本位とする宗旨は、親鸞聖人の宗旨である。

一文不知の者が「我れ精進を行じて忍んで終に悔いじ」と大悲を垂れ給うた如来に帰するのであるから、仏前にひれ伏すより外に途がない、仏を仰いで信ずる外はない。僧宝を本義とする禪宗とは反対に立つものである。

世には仏とも法とも思わぬ者の多いのに、太子が、篤く三宝を敬えと勧め給うたことはまことにありがたいことである。

沙弥教信

近頃の僧侶は、どうも人を教化しようと思つて布教している。これで「聖教よみの仏法を申し立てたることなし」というお言葉の通りになる。僧侶は第一に自己は何者であるかを思わねばならぬ、我は布教する者であると思つて布教すると、人が信仰をとらぬ。それゆえ先師も「尼人道のあら尊やありがたやと称うるをきいて人が信を取るなり」といわれている。

この点からいえば、かの沙弥教信などは実に理想的の僧分とあがめられるべき人だ。教信は「外に賢善精進の相を現する」ことを恐れて、牛追いをしながら念仏を唱えて播州賀古の宿についた。教信は他人の荷物を運んで、その労

金で生活し、身にボロをまとうて、あるかなきかの如くに一生を過した。

教信は、人を教化しよう、信仰を得させようという観念が毛頭なかった。ただ一心に念仏を唱え、未来の往生一定を喜んでいるのみであった。教信には眼中位勲なく、財宝もなく、常に赤食洗うが如き中に、深く燃ゆる信念を抱いていたことは現今の僧侶が大いに学ぶべき所である。

單純なる信仰

真宗の安心は、行を積み、善根を修めよ、報謝の行を為せというような難しいものではない。弥陀如来はこの凡夫を可愛相に思召し、汝を助けるからそのまま来れ、と仰せられたのである。

それ故に、如来のお呼声を聞いたならば二言も三言もない。恰も、貸主の前に呼び出された債務者が、これは自分に借金があるからだ、さあどうしようかと心配して行つた時思いもかけず、その貸主が「貴方の借金は一厘も残さず皆帳消しにするから心配しないように」と言われた時、この債務者はどうであろう。ああありがたい、我が身は何と幸福者であろうか、などそんなことを考える余裕はない。ただそのまま救うという一言を頼りにするより外にない。その一言が唯一の証拠である。

今阿弥陀如来が、「惡逆の凡夫、汝の罪惡の借金は皆引

き受けた」と仰せられるその御一言が頼りである。

信心は正に人生の目的

近頃の人はどうも信心を求めるについて結果に眼をつけている弊がある。或者は品格を高めるためにし、或者は安樂な生活を営まんとし、或者は妄念を止めんとするためにするようである。

これは恰も金を沢山貰おうために親孝行をし、自分の快樂を得るために孝行をする謬見と同じである。真実の親孝行者は金銭とか安樂とかは眼中にないはずである。

もし自分の品格を高め、安樂に日を送らんために信心をいただくというならば、信心は処世のための手段たるにすぎない。これでは信心が余りに卑俗である。我等が行詰つた時に求める道なるものは、目的其自身で、手段であるべきではない。この迷界を脱離しようという欲求以外に信心が要求せらるべきではない。信心は正に人生の目的であらねばならぬ。そうでなければ一時的の信心で永続はしないのである。功利的な結果に眼をつける様な信心はよろしくない。

一世に勤苦せよ

報謝の大作は自ら励んでしないと懈怠になるものである。「我が心にまかせずたしなめと御掟なり。心にまかせてはさてなり。即ち心にまかせずたしなむ心は他力なり」とあ

る通り、煩惱にまかしては他力の大行は実行されない。法然上人は御在世当時毎日七万遍の念仏を唱えられた。そしてその称名は何のためかというに「凡夫は縁にしたがい易て退しいものなれば、いかにもいかにものはげむべきなり」と述べられている。「唯懈怠をふせぐためなり」とも述べられている。いかにもありがたい思召しである。又釈尊は信後の報謝の励むべきことを説かれて「善本を積累せよ。一世に勤苦すと雖も須臾の間なり、後には無量寿仏国に生れ快樂極まりなし云々」と誠に励まされている。

愚夫愚婦とは

大和の法隆寺の講習会で、私は始終信仰上の話をし、前田慧雲博士は「日本仏教の特色」を非常に丁寧に話をせられた。

その時、会のはじまる前に一人の紳士が来て「私は愚夫愚婦のために話さるる説教なら聞きたくない」と云いました。私等は突然この言葉を聞いて一寸驚きました。やがて私は問いました。

「そうですか、それでは先ず愚夫愚婦の定義を聞かして貰いたい」

と云いますと、前田さんもそばから

「それでは先決問題として賢愚の差別を聞かして頂こう」

他力念仏と現世利益

三 瓶 英 徳

「人生の行路難は、山に非ず、川に非ず、人情反覆の間にあり」という語を漢学の造詣深い関鹿門先生から聴講し、六十五年後の今日なを脳裡に浮かびます。人間一生涯の行程には、難関にも悲喜にも数知れぬ程突きあたるのであります。

私の只今の生活は、人情反覆の間にあって身心を勞しませけれども不安は更にありません。衣食住については何の心配もなく福寿園（旧名養老院）の御厄介になり、五十三人の老男女の集団生活であります。

私は幸にして有縁の大善知識近角常観先生から他力念仏を聴きとらせて頂いたお蔭で、健康にも恵まれ、読書も出来、近い処の温泉へも時々特別に行かせて頂き、快く此処に安住させて頂けるのは、全く他力不思議、他力廻向で慚愧と感謝に念仏させていただく外はありません。

しかしながら私は今念仏について心を勞し、発声念仏を遠慮して心の中で念仏し、鼻腔の奥まで念仏が出て下さる

といわれました。然しこの紳士は何も答えなかった。最後に管長の佐伯さんが「太子の憲法にも一切聖愚、皆是凡夫という意味のお言葉もありますから」と述べられ、ともかくもその話は有耶無耶の中に葬られました。

人というのは、自ら惡に居て、しかも惡に居ることは知らない。唯倫理的の見解を以て、我は悪いことをした覚えがない、少くとも善人の仲間に入るべきであると、自分から善人悪人の区別をつけて、自分は善人の仲間に入り、得意然として、悪人のための説教は聞きたくないというそぶくようなものである。

聞思の力

利井鮮明和上は、『教行信証』の総序文の、

「聞思して遲慮することなかれ」の句の「聞思」をば、平たく訳して「聞いた通りをそのまま思うのである」と云われたが、誠にありがたい言葉である。聞いた通りがやがて信の門をひらく鍵となるのであるから、聞即信である。

この力は実に大なるものである、極重の罪人も仏を信ずる当体に往生に間違いない身にしていただけるのである

程度で日夜を過ごして居ります。

これについて岐阜県の高賀重治先生（医師）から大いに叱られ、狂人を粧うて大声念仏しようかと考えましたが実行の勇氣が生まれませんでした。

池山先生が四十二歳の時、念仏門に入られましたが、学校などではなるべくお念仏をおさえておられました。その頃、広島県鞆の明円寺で近角先生と講話された時、住職に「寺はいいなあ、すこしも遠慮なしに、らくらくと念仏申すことが出来る、寺はいいなあ、」と云われたと伝聞いたします。

念仏を嫌う人は、念仏すれば死が近づく気がする、念仏を称える人が意地わるの悪い奴だ。他人に善い人と思わせる詐偽手段に称える、念仏を称えれば悪いことが出来ぬから称えぬ、と私に言うた人もありました。

現代の思潮は唯物論者でなくとも、宗教信仰は無用だ、すべてが現実主義、現実利益がありがたいとし、特に他力

信仰は有害無益だ、非社会的だ等云う者が居ります。

しかし、念仏に対する迫害は昔も今もあります。親鸞聖人の御時代にも念仏者は苛酷なあつかいを受け、殉教者も数多くあつたのであります。

現世利益ということを一一般には、病気が治る、金が儲かる、家庭が円満になる等々の事を云うて自分の宗教へ引き込もうとする新興宗教などがあります。

真宗の現世利益とは雲泥の差があります。真宗では不幸にして病気になるれば医師にすがり、それも不治となつては涙の絶え間のない中からも、或は貧乏のどん底に苦しむ中からも、そのそくばくの業報を憐み同情されて可哀相に思し召して下され、必ずたすけるぞ、見捨てはせぬぞと御一緒して下さる親の大慈悲に全托して、安心し満足して生きられるのであります。

御和讃に

如来の作願をたすねれば苦惱の有情をすてずして

廻向を首としたまいて、大悲心をば成就せり。

とあり、又正像末和讃には

五濁の時機いたりては道俗ともにあらそいて

念仏信ずる人をみて疑謗破滅さかりなり。

といましめられてあります。

現世利益和讃には

ためには最上の法なり、自余の教法はすぐれたりともつとめ難し」等の文があります。如来の教誡の前には如何なる人も頭はあがりません。真宗で救われる道は、他力廻向の一つで、如来の前に無条件降伏し、保留の条件の要はありませんが、島根の妙好人、浅原才市翁は、阿弥陀さん助けたりやあ助けさしやう罪はようやらん罪はよろこびのたねと云われました。

善導大師の二種深信のお教訓は浄土真宗の極致で、法と機（人）について廻向の信行を示されてあります。大無量寿経には、私共凡夫の心をあきらかにお説き下さつて、「常に盗心を懐き、常に邪惡を懐き、常に憍慢を懐く」と示され、泥棒根性、色氣根性、威張りた心などで満たされていて、何処へ行つても嫌われる汝の業報が可哀相で見捨てて置けぬ、必ず助けるぞとの大慈悲真実が五劫、永劫の御思案と御修行で、その本願成就して下さつたのが南無阿弥陀仏であるとお知らせ下さい。

涅槃経には、仏は親なり一切衆生を救わずはおかぬ、阿闍世ごとき五濁の凡愚のために救いを成就していられると教えられます

大経には「たとい身をもろもろの苦毒の中におくともわ

一切の功德にすぐれたる南無阿弥陀仏を称うれば三世の重障みなながら必ず転じて輕微なりとあり、しかもその称名は

真実信心の称名は 弥陀廻向の法なれば

不廻向と名づけてぞ 自力の称念きらわるる

と、他力自然の念仏であるとおしえられています。

又教行信証には、「金剛の真心を獲得する者は横に五趣八難の道を越え必ず現生に十種の益を得」と述べられて、
一には冥衆護持の益 知らぬ処からお護り下さる
二には至徳具足の益 種々の徳が身心にそなわる
三には転悪成善の益 浅ましいことが転ぜられる
四には諸仏護念の益 もろもろの仏にまもられる
五には諸仏称讃の益 もろもろの仏からほめられる
六には心光常護の益 仏の光明の中におさめ護られる
七には心多歡喜の益 心に多くの喜びがあふれる
八には知恩報徳の益 御恩報謝の念仏生活が出来る
九には常行大悲の益 念仏するのが済度のたすけになる
十には入正定聚の益 必ず往生出来る身になれる。

歎異抄には「たとい諸門こそりて 念仏は甲斐なき人のためなり、其宗浅しいや」と云うとも、我等下根の凡夫の

が行は精進にして忍んでついに悔いし」との大御心によつて私共の助かる道が開かれたことをお説き下さつてあります。私共としては唯廻心懺悔して大悲を仰ぎ念仏申す外はありません。

亡き人と思えば悲し夢にみて温情感じた念仏する
老いぬれば愚痴と我慢はすこやかに不自由の身をもたえ
生き行く

○ 風夜疎々胸中頭 行住坐臥醉夢閑
元来愚悪我奈何 唯称弥陀心自閑

○ 老朽八七隻眼身 福寿園中環境醇
四恩海中願船客 野納称名万里春

○ ただ念仏われにふさわし千人力

△昭和四二、三、二九日、V

科学者の目に映る歎異鈔の驚異

花 田 正 夫

本年四月に名古屋ではじめての医学総会が開かれ、全国十萬の医師のうち三万余の方々が集つて、壮観でありました。その節出席せられた京都大学の東昇さんが、十四年振りに、折よく一道会の例会の席におたずね下されたので、科学と宗教、宗教といつても親鸞聖人の提唱された真宗についてお話をさせて頂きました。

それを聞かして貰つて、科学者の目に映る歎異鈔の驚異という感を深くしましたので、東さんのお話を要約しながらすこし私の所感を述べます。

東さんは第一に、歎異鈔の二章の後半、

「弥陀の願まことにおわしまさば釈尊の説教虚言したまはたまうべからず、善導の御釈まことならば、善導の御釈虚言したらごとならんや。法然の仰せまことならば親鸞が申すむねまたもつてむなしかるべからず候か」

を引いて、

「ここに三千年の歴史を貫ぬいて輝く久遠の眞実が知ら

を引用して、

「このよき人の仰せ一つで満足せられる世界は、矢張り宗教の超時間的眞実性によるので、そこには學問を要としない特異性があらわれております。科学の研究を仕事とするものには、師の教をうけると、更にそれを検討して、あらゆる學問を骨肉を削つて研究して、それを補正し、充足せしめることに専念せねばなりません。そうでなければすぐ立ち遅れとなり、陳腐なものとなります。そこには變化をさだめとして、万古不易の眞実というようなのは見出せません。ここにも聖人の住したまう信界のすばらしさを仰ぎます」

第三に、同じく第一章の

「弥陀の本願には老少善惡の人をえらばれず云々」を引用して

「宗教の世界は、何時でも、誰でも、何処でも、開かれ眞実であります。老人も若人も、善人も惡人も、更に居住坐臥をえらばず、時処所縁を問われぬのであります。即ち、時間的、空間的、人間的一切の條件をはずしての眞実の世界であります。」

然し科学の世界は条件下の眞理であります。たとえば新幹線に乗れば東京名古屋間を二時間で行けます。これは科学の眞証することでありますが、それには、暴風雨や地震

され、しかも七百年前の親鸞聖人の仰せは、そのまま現在の私の上にまこととして仰がせて頂いております。こうした世界は科学の世界にはありません。たとえばニュートンは科学界の開祖とも申されてよいけれど、その説がそのままだでは現在には通用しなくなり、近くは原爆で有名なアインシュタインの學説も現在では修正されております。科学者にとつては單に師の説をそのまま信奉していたのでは進展はありません、常にその説を批判し実験してそれを越えて行かねばなりません。芸術の世界でもその通りで、一人の師匠の流れをうけた、所謂亜流者では駄目になります。それなのに宗教の世界のみに見られる歴史を越えた眞実をこの歎異鈔の中に聞かされ、且つ私の現在の上に仰がせて貰えるとは、全くすばらしい世界、広大な境界で驚くほかはありません」

第二に、同じく第二章の

「親鸞におきてはただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとの仰せをこうむりて信ずる外に別の子細なきなり」

や線路の事故などが無いという條件が揃つての上のこと
で、若し條件の一つでも欠けますと二時間では行けなくな
ります。

先年も航空事故があつて沢山の死者を出しましたが、その遺族の方々は「絶対に落ちない航空機を！」と訴えておられますが、これも遺族の方々にとつては切ない願いでそのお氣持はよくわかりますけれど、条件下の眞実以外に出られない科学性をよく理解して頂きたいと思ひます。私の友人で、医学部を卒えて三十年、医療の道に専念しているいはばその道のベテランと申せる人でも、自分は誤診してはいないだろうかと疑いはじめると夜も寝られないことがあると云つております。

いわば科学的眞実は、無數の条件下の眞実でありましてその條件は何時何処で狂うか知れませんが、大きな不安につつまれた眞実と申す外はありません。もとより骨身を削つて努力している科学者は、その條件を段々すくなくしようと思ひに精進し、すこしずつでも目的に近づくよう努力をしておりますけれど、無条件下の眞実、絶対の眞実という域に到達するには、遠い遠い未来、それは天文学的數字をもつてあらわす外はない未来の話であります。

そこに正しい科学性の理解に立つ時は、絶対眞実、何時でも、何処でも、誰にでも開かれた眞実の宗教の世界を求

めそこに安んずる外には、安心立命の道はありません。それなのに、或科学者は、科学が進めば宗教は無用になると申しておるようですが、これは科学の分限を越えた言い分で全く思いあがつたことではありません。

以上の東さんの説は全くいやと申せぬことで、ゲエても「人類は進歩するが、人間はちつとも進歩しない」と観破しておりますように、東海道を徒歩や輿で旅した昔と新幹線で往来出来る現在では雲泥の差はありますがさてそれを利用している人間そのものとなりますと、悪口言われるとカンカンに怒り、人の幸福を見ると羨やみ、ねたみ、そして心というものは、チットモ昔と変っていない、すこしもよくなったと云えないので、そうした問題の解決は、千古万古同じ教によって開かれる外はありません。真に仏道に徹しられた方々の教というものは、何時でも何処でもつねにあたらしく、生き生きとして心にひびくものでありますそれなのに宗教は古い、仏教だって、キリスト教だって昔の人の教だ、現代にはおくれて無用だと云う人は、人力車が飛行機や自動車になると人間までが立派な文化人になったとでも幻想するのでしょうか。

次に、東さんは、宗教によつて安心立命したならば、科学は無用である、そんな条件下の真実の追究はつまらぬな

法 信 抄

○ 東 京 都

柳 瀬 治 留

……近角先生の主なる(特異)信仰表現、実験を身をもつて示されたものをあげましょう。

「皆が崖の下だから、上が判らんのだ。判らんでもついて来い、俺は救われているんだ。この強力に判らんながら従つて行く。これだ」

身をもつて示されたものに「袋の話」があります。「袋の中が空で困るというのに、それだから、と底の方から袋を裏返しに入って下さるのが救いだ。」

それから「猫の首玉を摘んでぶら下げる、と掴もうとしていた大地の爪も外れて、四肢ブラブラに宙にぶらさが(無手)これが救いだ」

それと等しく珠数の房を摘んで壇机の上から下に珠数を垂らし、「救いはこれだ」

と示されました。これ等が他力救済をじかにお示し下されたものとして、目にまざまざ見えるものです。云々。

どと思う人があるが、それは狂信者、迷信者と申す外はありません。①医学総会の会場で、○○教と称する人達が来て「ガンは祈祷でなおる。手術しなくてよい」と大声で宣伝しておりましたが、ガン細胞は矢張り自然科学的処置による外はありません。同時にまた科学さえあれば宗教は無用と云うのも科学の過信であります。宗教の教えによつていのちのささえをいただきながら、科学性をよく知って、その研究に私の生涯をかけたいと願っております」

と結ばれました。

清沢満之先生の語録で

科学と道徳とは、有限と有限の関係を明かにするし、宗教と哲学とは、無限と有限との関係を明かにするが、哲学は智的理論的で、宗教は体験による。

という意味のことをたしかに読みましたと思いますが、そこにおのずと絶対と相対との世界の別がしらされますと共に、科学的真理と宗教的真理のおのずかなる差も見出されます。然し現在東さんのように私自身は科学の世界の仕事に従事しておりますため、歎異鈔を拝読しまして、東さんのような驚異の心が失われていることを知らされ、且つ愧じ、且つ謝しながらこの稿を終ります。

京都市 山村 信子

……子供(今春京大卒業するはずの)は一月二十二日に友達の所に行く途中で遭難して亡くなりました。……

人間の宿業には如来様も一指もふれることは出来ないといふ宮城先生はかつて教えて下さいました。生きてゐる限り宿業の限りをつくして行かなければならないのでしようけれど、よくまあ御法に逢わせて頂いていて、宿業を我が身に受けて行くことを聞かせて頂いていたことと思います。仏かねてしろしめしての御めぐみだったこととてございましょう。聞かせて頂いていなかつたら、気も狂わんばかりでしたでしょう、悲しみも、悲しみを背負つた私を如来様が背負つて下さいます。悲しみ歎くままで「すぐにおいでよ」と呼んでいて下さいます。

毎晩お勤めのあとで亡き子の写真を拝んで居りますと、亡き子を通じて如来様の招喚のお声をきかせて頂きます。悲しみの涙はいつ渇くとも解りませんけれど、如来様と亡き子と一つになって慰められております。……

花吹雪亡き子と呼ばば御名となり

春嵐散りてかえりし寂光土

春嵐先達の子に我もまた

桜若葉子の呼ぶ声かみほとけか

あ と が き



長い間の降雨、菜種梅雨、という言葉もこの歳になつてはじめて実感をもつて知らされました。農作物に被害がありますように老病弱者には、障害も多いことであります。やつと今日晴れ間を見せて、新緑の美しさがやくばかりであります。

五月は親鸞聖人の降誕会が各地に催されますこと、聖人の流れを汲む者に新しいよろこびの月であります。

深きみ法にあいまつる、身のさち何にた
とるべき
ひたすら道を聞きひらき、まことのみむ
ね頂かん
永久のやみよりすくわれし身の幸何にく
らぶべき
大字のみなをとなえつつ、世のなりわり
にいそしまん。

海の内外のへだてなく、みおやの徳のと
うとさを
わがはらからにつたえつつ、みくにの旅

を共にせん。

五月晴れの空に高らかに讃歌のひびきわたり、吾々の心に大きな法のうるおいとなりますように祈念申すことです。

○ 福島先生の御原稿は「人間と真理」誌にお載せになりましたものから続いて頂きます。先生御自身に近角先生の御著書をお味わい下さったものばかりで、私共によい指針をいただけますことであります。

菅瀬芳英師は、東京で同和学園をひらかれ、真摯な青年仏教学徒と寝食を共にして求道せられた方であります。慈光誌で時々すでに御紹介申し上げましたが、御法話により先生の信徳に浴させて頂きましょう。

三瓶徳英師はお元気にこの冬を越され、久方振りに所感断片を頂きました。御礼申し上げます。

御案内

六月三日(土) 午後六時半。
南区駈上町二ノ八八。一道会館。
観無量寿経講話

福島 政雄先生
御知友お誘いあわせ御来会下さい。
尙先生は四日午前九時半から教育会館で日本教育の原流について講話されます。当日の一道会は休みます。

御案内

○ 六月第二、第三日曜午後一時半、一道会。

市電、新郊通り二丁目下車、東へ三筋目、左へ入る。

○ 毎月二十四日午前・午後、昭和区小桜町、教西寺、法話会。
市電、御器所通下車。桜花学園東。

定価 半年 二百円(送共)
一年 四百円(送共)

名古屋市南区駈上町二ノ八八
編集・発行人 花田 正 夫
電話八二二局七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大字福谷
印刷 人 本 田 政 雄

名古屋市南区駈上町二ノ八八
発行所 慈光社
振替口座名古屋一〇四七〇番